

# 『苔の衣』の人物誤写考

——双子の「あに君」と「おと、君」——

松 村 美 咲

## 一

まことや、うちのおとゝのうへのもてあつかひ給師の宮のうへも、此中宮とおなじほどに、たゞならぬさまにわづらひ給しかば、北のかた、いかにせんといとなみ給しほどに、中宮よりはいますこしさきだちて、いときら／＼しげにて、二所つゞきていで給へりしを、北のかたはあさましとおぼしながら、おとゝにも宮にもかくし聞えて、あに君をば、いそぎ中納言のめのとのもとへわたし聞え給て、おと、君ばかりを、誰にもみせさせ給へりしを、宮、いかにしてか聞給けん、ほの心え給て、あながちにふかゝらざりし御心ざしは、こよなく思ひうとめ給つゝ、物うくのみもてなし聞え給ふ。

(夏 五一ページ)<sup>(1)</sup>

鎌倉時代中期に成立したとされる『苔の衣』の一場面、右大臣(引用部分では内大臣)の妻・東院の上の養女が、帥宮との間にもうけた双子を出産するところである。当時の読者は右の文章を読んだとき、少なからぬ衝撃を受けたに違いない。双子は日本の歴史の中で長らく嫌忌されていた存在であり、<sup>(2)</sup>『苔の衣』でも義理の祖母にあたる東院の上や実

父の帥宮に疎まれている。民俗的な負のイメージが影響したのか、古典文学で双子を目にする機会は少なく、中世以前の物語では『苔の衣』と鎌倉末期から室町の成立と言われる『木幡の時雨』<sup>(4)</sup>にしか見られない。先の双子出産は現存する物語文学の中では嚆矢のものであり、稀有な場面なのである。

『苔の衣』の「双子」をめぐるのは、不思議な点がある。前掲の場面では、双子は「あに君」「おと、君」と記されているように男子である。『苔の衣』の伝本は前田家本系統と穂久邇文庫本系統に分類されるが、前田家本には「あにきみ」(夏 一九オ―二行)「おと、君」(同三行)<sup>(5)</sup>、穂久邇文庫本には「あに君」<sup>(6)</sup>「おと、君」(一〇三ページ一行)<sup>(6)</sup>と記されており、当該箇所の子は「あに」「おと、」と諸本みな男子で一致している。<sup>(7)</sup>しかし、誕生の場面以降は女子の設定で話が進む。「おと、君」は二回しか登場せず、主要人物としては扱われていない。一回目は前掲の誕生の場面で、二回目母・帥宮の上が東院の上の奸計の失敗によって盗まれた後、不憫に思った父の帥宮に引き取られる次の場面である。

(帥の宮は)わか宮のおわするをみ給へば、いとよく母君に似給ふも、さすがあわれにおぼさるゝ。さしも心かろきかたにはみえざりし物を、心おさなき人のしいでたるにこそと、いとおしくおぼす。さやうの所にきて、人のもとなさんもいかにぞやおぼされて、わかみやをば、やがて御車にのせ奉りて、かへり給ぬ。(夏 六九ページ) 呼称が「わか宮(わかみや)」としか書かれておらず、情報量が少ないため、女子と断定はできない。一方、「あに君」は夏・秋・冬の巻に登場し、特に冬巻ではヒロイン格の人物として造型されている。作中では「少納言のめのとがもとへかくし給ひし女君」<sup>(8)</sup>(秋 七九ページ)、「人しれぬ姫君」(冬 一二七ページ)などと呼ばれており、その人生は波乱万丈である。双子であったために生後すぐ他所に隠され、後に帥宮の上に引き取られるが、母が亡くなってからは、大叔母の対の君などに養育されて式部卿宮家で暮らす。そのうち式部卿宮の娘・弟姫君の婿である兵部卿宮に愛されて懐

妊するが、弟姫君の母親・式部卿宮の上の怒りを買ってしまう。いたたまれなくなった「あに君」は尼姿になって住吉に移り、無事に男児を出産するものの、まもなく亡くなる。呼称からも物語の内容からも、「あに君」が初回以外女性であることは明らかだ。つまり、『苔の衣』の双子は男子として誕生するけれども、その後の展開では女子になっており、性別に矛盾が生じているのである。

この問題について、今井源衛氏は、

この人物（稿者注…双子の「あに君」）は冬巻の女主人公とも言える重要人物であり、にもかかわらず、このような間違いが最後まで訂正されずに終わつたのはどうしてなのか、いかにも不審である。（解題 三三二ページ）<sup>(9)</sup>

と述べており、「作者の思い違いか。」（夏 注五 一二二ページ）<sup>(10)</sup>と見ている。また、小田切文洋氏は、

男女の矛盾が、単なる作者の不手際によるのか（伝来の誤写は考えにくい）、物語後半の男主人公との関係での、女の双子への設定の変更なのかは判然としないが、姉君の不運が双子の生い立ちにあるとの理解は押さえられるであらう。（六三三ページ）<sup>(11)</sup>

と述べており、最初に男子とされた双子が途中から女子になる原因については不明としている。

しかし、どちらの指摘にも疑問が残る。先にも述べたが、「あに君」は双子という珍しい境遇であることに加え、物語の展開においても欠かせない人物として描かれている。端役ならともかく以後も活躍する重要人物が初登場する場面で、作者がその性別を間違えるだろうか。常識的には考えにくい。さらに、小田切氏が述べるように、作者が意図的に途中で男女を入れ替えたとしても、男子としているのは一度だけで、手間のかかることでもないのだから、そのまま放置しておく可能性は低いと言わざるを得ない。未だ納得のいく解決策は見出せておらず、あらためて検討する余地があると考えられる。本稿では、夏巻の初登場の場面における双子の性別について考察していくこととする。

## 二

前章で引用した今井氏と小田切氏の指摘のように、過失・故意に関わらず、作者が双子の男女を取り替える可能性があるだろうか。

『吾の衣』は、女三代の物語が描かれていると言われており、二つの系譜に分かれる。一つが西院の上―西院の姫君―中宮という西院の上の系譜で、もう一つが東院の上―帥宮の上―双子の「あに君」という東院の上の系譜である。これらの系譜を縦に見ると、西院の上側には直系の血縁関係があるが、東院の上側はみな血がつながっているものの、東院の上と帥宮の上は継母・継子、帥宮の上と双子の「あに君」は実の親子という関係になっている。さらに、西院の上の系譜は三代目で中宮の位に就いて栄華を得ているが、東院の上の系譜は不遇のまま終わる。このように双方の系譜は縦の関係において対照的に描かれている。

今度は二系譜を横の観点から見よう。先行研究で指摘されているものを含めて、世代ごとに今一度整理する。一代目は、右大臣の二人の妻・西院の上と東院の上である。西院の上は、宮家出身で、父が亡くなり母とさみしく暮らしていたところに右大臣が通うようになる。穏やかでかわいらしい性格で、夫に愛されて二男一女に恵まれるが、早くに亡くなってしまふ。それに対して東院の上は、右大臣の兄・内大臣の三女で、右大臣が三位の中将であったときからの妻であるが、その僻んだ性格ゆえに夫とは不仲で子も授からない。名前も境遇も対比的な二人の姿が見て取れる。二代目は西院の姫君と帥宮の上である。西院の姫君は右大臣と西院の上の長女であり、母と同じく夫の右大將に愛されて一男一女を生むが、早世する。一方、帥宮の上は式部卿宮の娘だが、叔母の東院の上に養女として育てられる。はじめは夫の帥宮との関係も良好だったが、双子を出産したことで疎遠になり、最後は人違いで盗まれたことを気に病んで死ん

でしまう。どちらも境遇や夫との関係が対照的になっている。三代目は中宮と双子の「あに君」である。中宮は右大將と西院の姫君の娘で、入内するものの、帝の弟の兵部卿宮に横恋慕されてその子を生む。双子の「あに君」は中宮に似通っているために兵部卿宮から愛されるが、そのために居場所を失い住吉へ移って亡くなる。二人ともに兵部卿宮に愛されて男児を生むが、中宮が自身の力では兵部卿宮から逃れられないのに対し、双子の「あに君」は自ら住吉に逃れて宮との関係を断つ。出自や生死、兵部卿宮との関係の対処が正反対である。系譜は横の関係においても対比構造になっている。以上のように、『苔の衣』では、西院の上の系譜と東院の上の系譜が縦横どちらから見ても対照的に描かれており、この構想は春巻から冬巻まで物語を一貫している。作者は二つの系譜を「女」の系譜として構成しているため、三代目の重要人物として組み込むときに双子は必然的に女性になるはずである。

さらに、物語取りからも作者が双子を女子の設定にしたと考えられる。『苔の衣』は、『狭衣物語』や『住吉物語』の影響を受けていると指摘されている。<sup>(19)</sup>『狭衣物語』では、主人公の狭衣が幼なじみの源氏の宮に思いを寄せるものの受け入れられず、偶然に見出した飛鳥井の女君を愛するようになる。女君は乳母の策略によって筑紫へ下ることになり、狭衣の子どもをおなかに宿したまま入水未遂して出産後に出家する。『苔の衣』冬巻はこの趣向を踏襲している。兵部卿宮は幼い頃からともに育った右大將の姫君に恋心を抱くが、姫君は兵部卿宮の兄のもとへ入内してしまふ。兵部卿宮は中宮に似た双子の「あに君」を愛するようになるが、兵部卿宮の子どもを身ごもったまま隠棲し子を産んだ後に出家する。

他にも、飛鳥井の女君と双子の「あに君」には影響関係が見られる。まず、二人の境遇についてであるが、飛鳥井の女君は

この女は、帥中納言といひし人の女なりけり。親たちはみな失せにければ、乳母の、主計頭といふ者の妻にて、な

ま頼りあるが、思ひかしづきて、年頃過しけるを、その男失せて後は、いとわりなきありさまにてありければ、(後略)。(巻一 八五ページ)<sup>(14)</sup>

と紹介されており、父母を失った後は乳母夫婦が後見していたが、乳母の夫が亡くなると生活が貧窮したとある。双子の「あに君」については、

人しれぬ姫君は、おい生給ふまゝ、にいとうつくしきを、かなしき物にしたまひしかど、心やすく見をき給ふ事もなくて、うせ給ひしかば、少納言のめのと、なくくむかへとりて、わたくしものに思ひかしづきつゝ、いかにせましと思ふに、故内のおとゝのおとりばらの姫君を、式部の宮のうへに、たひの君とてつけ聞え給ひつるは、古母うへにはおばにおはするぞかし、(後略)。(冬 一二七ページ)

と記されており、飛鳥井の女君と同じく両親を亡くして乳母に育てられ、後に対の君に引き取られる。どちらの女君も両親亡き後は乳母に養育され、強固な後ろ盾を持たず不遇な状況にある点が一致している。

次に、女君が男君の夢枕に立つ場面だが、『狭衣物語』では、

(狭衣は) 例の夜深う帰りたまひて、少しうちまどろみたまへる夢に、この君(飛鳥井の女君) かたはらにある、と思しくて、腹の例ならずふくらかなるを、「こはいかなるぞ。かかることのありけるを、今までなどか知らせたまはざりける。かばかりの契りのほどを、常はあさはかに思ひたまひつるこそ」と言へば、常よりももの心細げにて、行方なく身こそなりなめこの世をば跡なき水を尋ねても見よ (巻一 一二三ページ)

とあり、飛鳥井の女君が狭衣の夢に現れ、子を探ねてくれと頼んでいる。これは『苔の衣』の次の場面に似ている。

(兵部卿宮が) ふくるまでうちまどろまれ給はぬあかつきに、夢ともなく、ありし女君(双子「あに君」)の、うつゝ、にて見給ひしにもかはらず、いと物おもはしげなるさまにて、

「あかでのみあふせたえにしかなしき<sup>さ敷</sup>にわたり川にて君をまつかな

物はかなげにておひたち給ふ人のゆくゑ、かならず待とり給へ」とて、いみじうなくに、(後略)。

(冬 一六一ページ)

子どもを懷妊中に男君と生き別れ、夢の中でその遺児の存在を知らせる点が同じである。以上のように二人の女君には共通点が見られるため、双子「あに君」は飛鳥井の女君に重ねられていると言えよう。さらに、式部卿宮の上から疎まれて双子の「あに君」が住吉へ逃れるという趣向は、『住吉物語』で継母の奸計を知った主人公の姫君が住吉の尼君を訪ねて流離する点を模倣している。このように、双子の「あに君」は飛鳥井の女君や住吉の姫君という女性になぞらえて形成されているため、作者は今問題としてゐる双子を男ではなく女として構想した可能性が高い。

『苔の衣』の作者には物語執筆の初期の段階から、西院の上系と東院の上系の女三代の系譜を対照的に描くという構想があり、誕生の場面から双子は女子の設定であつただろう。したがって、作者が双子を男子に「思い違い」すること、途中で男子を女子の設定に変更することも考えられない。双子を男子にしたのは作者ではなかつたのである。

### 三

では、双子を男子にしてしまったのは一体誰なのであろうか。「作者」ではなく「書写者」である可能性はないだろうか。『苔の衣』の双子の問題は、書写者が「おと、君」の性別を誤つてしまったことに端を発すると考えられる。

辞書の記述をあらためるまでもなく、「おとと」は、「おとひと(弟人)」が音便化した「おとうと」が転じた言葉で、性別にかかわらず年下のきょうだいを指す語であつた。『苔の衣』には、双子誕生の場面を除くと三つの用例がある。

- ① 此頃権大納言ときこゆるは、故先帝の御おとうと、一世の源氏ときこえし二郎、大将の御おと、ぞかし。

「おと、」は「権大納言」という官職名や、一世の源氏の「二郎」つまり次男である点から、男性であると言える。この「おと、」は後の右大臣のことである。

② 古中つかさの宮のひめ君二所もち給ひたりける、(中略) おと、宮は、かたちなどもいますこしらうたきさまにものし給ければ、父宮も哀にかなしきものにあつかひきこえ給ひしが、(後略)。(春 五ページ)

「おと、宮」は故中務宮の「ひめ君」すなわち娘であり、女性だとわかる。

③ 少将はまだしきに、あくまでしづまりてみえ給ふを、おと、君はほこりかにあいぎやうづきてみえ給へば、御門、春宮なども、おかしきもてあそびぐさにおぼしける。(春 六ページ)

「おと、君」は直前に「次郎は七つになり給ふ。わらは殿上などし給。」(春 六ページ)と紹介されており、次男であることや童殿上しているという情報から男子であるとわかる。つまり、「おと、」は①と③では男性、②では女性を示しており、『吾の衣』でも男女双方に年下の弟妹を指す語として用いられている。

『吾の衣』に限らず、鎌倉・室町の物語全体でも「おとと(をとと)」は男女に関係なく使われている。全部で五十一の用例が見られたが、「年下」の意の用例を除くと、男性が二十三例、女性が二十五例であった。<sup>15)</sup> 男を指す場合と女を指す場合、用例数は拮抗しているため、男女双方に用いられた語と言えるだろう。逆に言えば、作者が双子の「おと、君」を初登場の場面から女兒と設定していた可能性も考え得ることになる。

しかし、時代が下って近世になると、「おとと」は弟妹の中でも年下の男のみを指すようになる。<sup>16)</sup> 現在「おとと」を年下の男きょうだいの意味でしか用いないのは周知のとおりである。現存する『吾の衣』は、古典文庫の底本の室町中期頃の写とされる穂久邇文庫本以外は近世の書写とされており、書写者が「おと、君」とある本文を男と捉えてしまっ



た可能性は十分考えられる。<sup>(17)</sup>

『日本国語大辞典』の「おととみや【弟宮】」の項目には、「おととみやはかたちなどいまいま少らうたきさまにものし給ひければ」と、先に挙げた『苔の衣』の用例が記載されている。語句の意味を「弟にあたる皇子。おとうとみや。」と説明しており、この用例の「おととみや」を年下の男きようだいとして解釈しているようだ<sup>(18)</sup>。しかし、用例の「おととみや」は西院の上のことである。西院の上は、中務宮の娘であり、右大臣と結婚して三人の子を産んでいるため、この「おととみや」が女性であることは動かない。現代の我々は「おとうと」と聞くと年下の男きようだいを思い浮かべるが、辞書の執筆者はその現代の「常識」で捉えたためにこのような間違いを犯してしまったのだろう。『苔の衣』で双子の「おと、君」が男子に勘違いされたのも、これと同様、書写者が近世の語感に影響されたからであると考えられる。

さらに、双子出産の直前に男児誕生の場面があるために、「おと、君」を男子に誤解した可能性もあるだろう。三条帝に入内した藤壺中宮は、第一皇子の東宮に続いて第二皇子を出産する。

八月十よ日、中宮御けしきあれば、内、春宮の御つかひ雨のあしよりけにしげきを、「めでたき御さいはひ」と、世人いひおもへり。日ごろなやみ給へるほどより、いといたくもわづらひ給はで、またおとこみこにてさしいで給へる御ひかりを、たれも／＼いかでかをろかにおぼさん。

(夏 五〇ページ)

書写者は、この男児の出産が脳裏に残っている状態で直後に続く双子誕生の場面を写したために、「おと、君」を「弟」、すなわち男子と思い誤ってしまったのかもしれない。

## 四

『苔の衣』の書写者は、年下ならば男女両方の意味を持つ「おと、君」を男子と思い込んだことで、もう一つ過ちを犯してしまう。双子の片割れも男子だとの誤解である。もちろん生物学的には、双子は一卵性・二卵性があるから、同性どうしとは限らない。男男・女女に加え男女の組み合わせもあり得る。<sup>19</sup>しかしながら、古典文学では、双子は同じ性別の者として描かれる傾向にある。『日本書紀』には「后、二男を生みたまふ。第一を大碓皇子と曰し、第二を小碓尊と曰す。（中略）其の大碓皇子・小碓尊は、一日に同じ胞にして双に生れます。」（巻第七・景行天皇紀 三四一―三四二ページ）<sup>20</sup>とあり、男男の組の双子が生まれている。『木幡の時雨』には二組の双子が登場するが、「いとうつくしきおとこ御子むまれいで給へり。（中略）又おなじさまのちごむまれいで給へり。」（二〇五ページ）とあるように男子どうし、「いとうつくしき姫君むまれいで給へり。又さしつゝき同御かほにてさしいで給ふ。」（二〇八ページ）とあるように女子どうしになっており、異性の組み合わせの双子にはなっていない。双子は同性であるという認識があったとすると、『苔の衣』の書写者が双子の「おと、君」を男だと思い込めば、必然的にもう一人も男だと理解してしまったとしても不思議はない。

誕生の場面で本来女子であった双子が男子になってしまった原因は、「おと、」を「弟」、すなわち男だと認識し、双子の一方までも「兄」と思い込んだがために起こった誤写ではないだろうか。つまり「おと、君」を男子と完全に信じ切っている書写者が、本来「あね君」と記してあった部分を「あに君」と解してしまった結果、原文「あね君」を「あに君」として写してしまった可能性が想定できるのではないか。「に（尔）」と「ね（年）」はしばしば字形類似による誤写が起る文字である。たとえば、『古典の批判的處置に關する研究』<sup>21</sup>の一覧にも文字交替が記載されている。

『苔の衣』の善本とされる前田家本の複製を検すれば、「あに」「あね」は次のように記されている。(〈内は字母〉)

- ① 「あに」〈安仁〉きみ (春 一オ八行)
  - ② 「あに」〈安丹〉きみ (春 三オ一〇行)
  - ③ 「あに」〈安耳〉君 (夏 八オ九行)
  - ④ 「あに」〈安丹〉きみ (夏 一九オ一―二行)
  - ⑤ 「あに」〈安尔〉 (冬 八オ五行)
  - ⑥ 「あね」〈安年〉宮 (春 一ウ六行)
  - ⑦ 「あね」〈安禰〉 (冬 四八オ四行)
- 「あ」はすべて「安」を字母とする字で、「に」には「仁、丹、耳、尔」、「ね」には「年、禰」を字母とする仮名が用いられている。⑤〈安尔〉⑥〈安年〉のように誤写の起こりやすい「尔」と「年」を字母とする例があるため、「ね(年)」を「に(尔)」と見誤り、「あね」を「あに」と写し間違えた可能性は十分にある。「誤写」こそが、双子の「あね君」が「あに君」と男子になった理由であると言えよう。

## 五

双子の性別が間違えられた背景には、双子が誕生したばかりの場面であつたことも大いに関係しているだろう。物語を読むときには、「元服」や「裳着」などの通過儀礼や官職名などから、人物の性別を認識する。以下に『苔の衣』の「あに」と「あね」の用例を挙げ、男女を特定できるかどうか見てみよう。まずは、「あに」について四例挙げる。

- ① (右大臣は) 人ざまなどもゆへくしくおはすれば、世の人もあに君の大将よりは、今すこし思ひまし聞え給。

「あに君」は「大将」という官職名により男性であることがわかる。

(春 五ページ)

② かくてとしごろになり給ぬれば、あに君九になり給ふ。この二月にげんぶくし給ひて、少将と聞ゆ。

(春 六ページ)

この「あに君」は「元服」し「少将」となったという情報から男性であることが確実である。

③ あに君には、つねにたいめんなどもまれ／＼なればにや、(西院の姫君は)いとつ、ましげにて、木ちやうにまぎれつ、かたはらにふし給へる。

(夏 四五ページ)

この場面は次兄が妹である西院の姫君のもとに帝の文を持って行く場面である。次兄が長兄の「あに君」に比べて、西院の姫君をあまり訪れないために、姫君は恥ずかしげにしている。右大将が西院の姫君の長兄である中納言を訪ねる場面では、「内のおとゞの宰相(中納言) いざなひ物せん」とて、忍びて齋院(イマ)へわたり給へれば、東の院におわするよしきこゆる人あれば、(後略)。(春 三八ページ)とある。このとき西院の姫君は東院の上に引き取られているため、長兄が「東の院」にいるということは妹の姫君を訪れていることを指している。このように、長兄は妹の西院の姫君によく会っている。その姫君と親しい長兄の官職が「宰相」であるので、③の「あに君」は男性であるとわかる。

④ このあしせんは、母うへの御はらに、中つかさのみやのうへにて物し給し人は、古おとゞのあにの、帥の大納言にてうせ給ひし人の御むすめぞかし、かの御せうとにて、がくもんのかたなどもめでたくいはれ給ひしに、にはかにだうしんをおこして、ふかき谷そこにもりゐ給ひつるを、しる人なかりけり。

(冬 一二八ページ)

右大将は、妻の西院の姫君の死を嘆いて入山出家する。阿私仙は、僧侶となった右大将の師匠である。ここでの「あに」は、阿私仙の父・帥大納言のことだが、「帥大納言」という官職名から男性だと判断できる。

次に、「あね」について二例挙げる。

⑤ 古中つかさの宮のひめ君二所もち給ひたりける、あね宮は、いまだおさなくより斎宮にゐたまへりしが、今は関白殿の北のかたにて、ならぶ人なくておはす。  
(春 五ページ)

「あね宮」は「ひめ君」「斎宮」という情報により女性であることが明らかである。

⑥ むかしの少納言のめのとがあねの、すみよしなる所に世をそむきてゐたるがもとへ、小大夫などがときどき物いひかはすを見をき給ひて、(後略)。  
(冬 一四七ページ)

この「あね」は、双子の姉君を生まれてすぐに引き取っていた少納言の乳母の姉である。「かくて、とくすみよしへおはしつきぬれば、(中略)有しあま君はまちよろこびつ、」(冬 一五四ページ)と、尼であることが記されており、女性だとわかる。

いずれの「あに」「あね」も、付加される様々な情報から性別を特定できる。「おと、」についても、先に述べたように男女どちらであるかは、前後の記述からはつきりとわかった。しかし、本稿で問題としている双子の誕生場面では、生まれたばかりであるため、事前にその性別を確定できる情報が何もないのは当然のことである。書写者はいきなり「あね君」「おと、君」に遭遇するのであり、判断を求められる。双子の性別を取り違える条件が揃っていた場面とも言え、書写者が「おと、」↓弟(男)↓「あね」↓双子の「あに」の連想で誤写を起こしてしまったのも無理はないだろう。

## 六

『苔の衣』で誕生の場面のみ双子が男子となっているという問題は、従来作者によるものとされてきた。しかし、『苔の衣』が西院の上系と東院の上系の二つの「女」三代の物語であり、『狭衣物語』の飛鳥井の女君や『住吉物語』の姫

君に重ねて双子の姉君を造型したことを踏まえると、作者は初めから双子を女子の設定にしていたと考えられる。したがって、作者が思い違いや構想の変更により双子の性別を入れ替えたとは考えにくい。じつは、この問題を引き起こしたのは、作者ではなく書写者である可能性が高いと考えられる。「おと、君」を「弟」つまり男子と思い込んだことで、双子の片割れまでも男子と誤解してしまい、本来「あね」であるべきところを字体の類似も相俟って「あに」と誤写してしまったという、書写者の勘違いが矛盾を生んでいた。思い違いという作者の汚名を晴らすことができたのではないだろうか。

# 注

(1) 『苔の衣』の引用は、鎌倉時代物語集成第三卷（笠間書院 一九九〇年）に拠り、巻名、ページを記した。必要に応じて傍線を付し、（ ）で人物名を補った。原文の意味の通じない箇所には、私に「ママ」と付した。なお、便宜上、巻名は「春夏秋冬」で示し、人物名は最終官職名を用いた。以下、同じ。

(2) 『苔の衣』の成立年代については、『無名草子』にその名が見えず、作中の和歌二首が『風葉和歌集』に収められていることにより、一二〇〇年頃から文永八年（一二七二）とされる。この成立論は『日本古典文学大辞典』第二卷（岩波書店 一九八四年）、大槻修・神野藤昭夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社 一九九七年）、『中世王朝物語・御伽草子事典』（勉誠出版 二〇〇二年）等に拠る。なお、今井源衛校訂・訳『苔の衣』（中世王朝物語全集7 笠間書院 一九九六年）の解題では、春巻の作中歌

かひありと鳴く鹿の音のことならばなほ帰りこん逢坂の関が、『続古今和歌集』の巻第九・離別歌・八三九番歌・前大納言為家の

かへりこんまた逢坂と頼めども別れば鳥の音ぞなかれぬる

を引いているとして、成立の上限を文永二年（一二六五）と推定している。しかし、『中世王朝物語・御伽草子事典』

では、為家歌を引歌と認定することに慎重な姿勢をとっており、今井氏の説には従っていない。

- (3) 双子を忘む慣習は中世に既にあったようで、鎌倉末期から室町の成立とされる『木幡の時雨』には、「三君、御はらもちたくものし給へば、「これや二子といふ物ならん」と、人々もなげくに、(後略)。(二〇七ページ)とあり、懷妊中の女君のおなががひどく大きいため、周囲が双子が生まれるのではないかと嘆く様子が記されている。『木幡の時雨』の引用は、鎌倉時代物語集成第卷三(笠間書院 一九九〇年)に拠り、ページを記した。本文中の『木幡の時雨』の引用も同じ。近世の記録や随筆にも双子に関する記述が見られ、享保三年(一七一八)に刊行された谷棗山著『俗説贅辨続編』下の「双生三生辨」には「世俗一産に子二人うみ又三子うむ事あり。是を見にくき事としていみかくし或其子を殺しつづる事あり。又産婦是におどろきて血暈<sup>ケツ</sup>して死する者あり。」(太田素子編『<sup>日本書</sup>マビキ慣行史料集成』六〇五ページ 刀水書房 一九九七年)と記されており、時に殺害されるほどに双子が忌み嫌われていたことがわかる。

- (4) 安達敬子氏は「擬古物語と源氏物語——『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合——」(源氏物語研究集成第十四巻 風間書房 二〇〇〇年六月)の注四において、『苔の衣』と『木幡の時雨』の関わりについて次のように述べている。

双子の登場の他にも『苔の衣』には、『木幡の時雨』と類似する場面が散見される。たとえば、本文中に引用した、失踪した姫君が夢中に子供の父に訴えかけるところは『苔の衣』にも同様の場面が存在する。(中略)

また、『木幡の時雨』、中の君が双子の若宮たちを手放す場面での詠歌、

雲居にて枝を並べん姫小松けふは泣く泣く引き分かつとも

男児に「姫小松」はやや不審であるが、これも『苔の衣』巻三に、母を亡くした姫君が伯母中宮に引き取られる際の中宮と父右大将の贈答

植ゑ置きし人はなくとも姫小松今は雲居に生ひ上らなん

姫小松引く人なくと雲居まで生ひ上らなんことをしぞ思ふ

を踏まえると考えれば説明できよう。『木幡の時雨』が『苔の衣』を参照した可能性は高いと思われる。

安達氏の指摘のように、『木幡の時雨』には『苔の衣』を模した場面・要素が見られる。「双子」という趣向も『苔の衣』

の影響による可能性がある。

- (5) 前田家本の引用は、複製『尊經閣叢刊巳卯歲配本』（育徳財團 一九三九年）に拠り、卷名、丁、行を記した。以下、同じ。

- (6) 引用は、久曾神昇校定『苔の衣』上巻（古典文庫第81冊 一九五四年）に拠り、ページ、行を記した。

- (7) 前田家本以外の前田家本系統の伝本を確認すると、東京教育大学本では「あに君」（夏 一三ウ八行）「おと、君」（同九行）、国会図書館二冊本には「あにきみ」（一 五七オ二行）「おと、君」（同三行）と記されている。穂久邇文庫本以外の穂久邇文庫本系統の伝本を見てみると、龍門文庫本では「あに君」（上 五八オ四行〜五行）「おと、君」（同六行）、盛岡市中央公民館本では「あにきみ」（夏 一五ウ九行）「おと、君」（同 一六オ一行）、宮内庁書陵部二冊本では「兄きみ」（二 一一ウ一二行）「をと、君」（同 一四行）となっている。引用は、東京教育大学本、盛岡市中央公民館本、宮内庁書陵部二冊本は国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベース、国会図書館二冊本は国会図書館デジタルコレクション、龍門文庫本は阪本龍門文庫善本電子画像集で公開されている画像資料に拠り、卷名、卷数、丁、行を記した。なお、前田家本系統の伊達市開拓記念館本を底本とする前掲注(2)中世王朝物語全集7では、「あに君」には「兄君」、「おと、君」には「弟君」と漢字が当てられており、双子が男児であることがより明らかな表記になっている。

- (8) 双子誕生の場面では、「あに君」を隠したのは「中納言のめのと」の所であった。しかし、その後「中納言のめのと」は「少納言のめのと」と呼ばれており、矛盾がある。「中」と「少」は誤写が起きやすい字であるため、誤写の可能性が考えられる。今井源衛氏も誤写を想定しているが、「それよりもむしろ作者のミスと認めるべきだろう。」（『王朝末期物語論』第五章『「苔の衣」論』二三〇ページ 桜楓社 一九八六年）と述べている。ただし、その根拠については示されていない。

- (9) 引用は、前掲注(2)中世王朝物語全集7に拠り、ページを記した。

- (10) 引用は、前掲注(2)中世王朝物語全集7に拠り、卷名、注番号、ページを記した。

- (11) 引用は、小田切文洋「物語文学における双子譚的要素の展開 『今とりかへばや』など」（『國文學 解釈と教材の研究』



第四十三卷五号 一九九八年四月）に拠り、ページを記した。なお、小田切氏が「伝来の誤写は考えにくい」として、  
る根拠については氏の論文には示されていないようである。

- (12) 女三代の物語については、神野藤昭夫氏が「三代の物語が、じつは右大臣と西院の上の娘が、右大将の妻であり、右大将夫妻のむすめが東宮女御であるという、女系三代の物語というべきである」と述べている。（鎌倉時代の物語『苔の衣』の方法と特質）一六二ページ（日本文学講座4 物語・小説Ⅰ 大修館書店 一九八七年）足立繭子氏は、母系三代の物語として西院の上——西院の姫君——中宮の系譜を本系の物語とし、帥宮の上、弘徽殿の女御腹の姫宮、双子の「あに君」を傍系の物語に位置づけている。（『苔の衣』論——母系物語としての意味——）（『年刊日本の文学』第三集 有精堂出版 一九九四年）大西美穂氏は、西院の上系（西院の上——西院の姫君——中宮）を主流、東院の上系（東院の上——帥宮の上——双子の「あに君」）を傍流と見て、母系三代の物語と双子の趣向について論じており、「双子出産はそのマイナスイメージを効果的に用いることで、二つの母系物語をより対照的に描いていると思われる。」と述べている。（『中世王朝物語『苔の衣』・双子出産という趣向をめぐって』六〇ページ（『日本文藝学』第三十四号 一九九八年三月）

- (13) 『狭衣物語』の影響については、坂井壽夫「『苔の衣』に於ける前代文学の影響——狭衣源氏の影響を中心として——」（『古典文学の探究』成武堂 一九四三年）、加藤奈保子「『苔の衣』の人物形成——『狭衣物語』撰取の方法——」（『大妻国文』第三十号 一九九九年三月）、住吉物語の影響については、桑原博史『中世物語研究——住吉物語論攷——』第一章第三節「中世物語における住吉物語の位置」（二玄社 一九六七年）を主に参照した。

- (14) 『狭衣物語』の引用は、新編日本古典文学全集29（小学館 一九九九年）に拠り、巻数、ページを記した。必要に応じて（ ）で人物名を補い、ルビは適宜省略した。以下、同じ。

- (15) 鎌倉時代物語集成に所収されている『あきぎり』『あまのかるも』『石清水物語』『いはでしのぶ』『風につれなき物語』『苔の衣』『恋路ゆかしき大将』『小夜衣』『雫に濁る』『とりかへばや』『松浦宮物語』『むぐらの宿』『無名草子』『夢の通い路物語』『夜寝覚物語』『我が身にたどる姫君』『豊明絵草子』に用例が見られた。

(16) 『日本国語大辞典』第二版第二巻には、「おとと」の項目の語誌に、「(4)現代のように兄弟のうち年下のものを指すようになるのは江戸時代からであるが、(後略)。」という注記がある。

(17) 室町中期の書写とされる穂久邇文庫本でも、双子は「あに君」「おと、君」と表記されている。中世では「おとと」は男女双方に用いられていたため、「おと、」を常識として「弟」に捉えたと断定はできない。しかし、「おとと」が男女兼用の語である以上、「おと、君」を「弟」と認識した可能性はある。

(18) 引用は、『日本国語大辞典』第二版第二巻(小学館 二〇〇一年)に拠る。引用した用例は、『日本国語大辞典』第一版、第二版ともに記載されている。第一版第三巻は一九七三年に、第二版第二巻は二〇〇一年に刊行された。一九九六年には中世王朝物語全集7『苔の衣』が出版され、「妹宮」という漢字表記や「妹宮は器量などもそれ以上に可愛らしい様子でいらしたから、」(八ページ)という訳により、用例の「おととみや」は女性であることが周知された。しかし、第二版でも「おととみや」は「弟にあたる皇子」と第一版と同じ説明がされており、第二版には中世王朝物語全集7の内容が反映されていない。

(19) 一卵性双生児を妊娠する頻度は〇・四パーセント、二卵性双生児を妊娠する頻度は人種により異なるが、自然妊娠の場合日本では〇・二〜〇・三パーセントと言われている。一九九〇年代半ばに不妊治療の影響などにより二卵性の出産率が一卵性を上回ったが、自然妊娠では二卵性よりも一卵性のほうが多い。一卵性を出産する頻度は現代でもほぼ一定である。中世においても二卵性よりは一卵性が生まれる確率の方が高かっただろう。それが古典文学において双子が一卵性であることに影響していると考えられなくはない。(医療情報科学研究所編『病気がみえるVol.10 産科』第四版「多胎妊娠」メディックメディア 二〇一八年)

(20) 『日本書紀』の引用は、新編日本古典文学全集2(小学館 一九九四年)に拠り、巻数、天皇名、ページを記した。ルビは適宜省略した。

(21) 池田亀鑑『古典の批判的處置に關する研究』(岩波書店 一九四一年)第二部第十五章「日本古典作品に於ける本文轉化の諸類型とその實例」参照。

(22) 前掲注(2)中世王朝物語全集7では、「兄君よりは」となっている。次兄に比べて長兄の方が妹の西院の姫君によく対面していることが明確にわかるため、「あに君より」という表現の方が適切か。

(23) 妹君が長兄、次兄の片方と仲がよく、もう一方とは仲が悪いという例は『夜の寝覚』にも見られる。

宰相中将、おほかたの人からも兄君よりはなつかしく、情あくまであるところつきて、幼くより、この御方に、あはれなるものにとりわき心寄せ、この御事をば、「身に代へても、いかにて」とおぼしたるに、(後略)。

(巻一 一一一ページ)

とあるように、妹の中の君は長兄の左衛門督よりも次兄の宰相中将と仲がよい。引用は、新編日本古典文学全集28(小学館 一九九六年)に拠り、巻数、ページを記した。ルビは適宜省略した。

(24) 阿私仙に関わる系図は解釈が定まっておらず、阿私仙の妹が嫁いだ中務宮を誰と捉えるかにより変ってくる。前掲注

(2)『中世王朝物語・御伽草子事典』では中務宮を西院の上の父と同一人物と解釈しており、その場合阿私仙の妹は西院の上の母、阿私仙は西院の上の伯父となる。一方、中世王朝物語全集7のように、中務宮を西院の上の父とは別人と捉えた場合、阿私仙は東院の上、右大臣の従兄妹となる。

